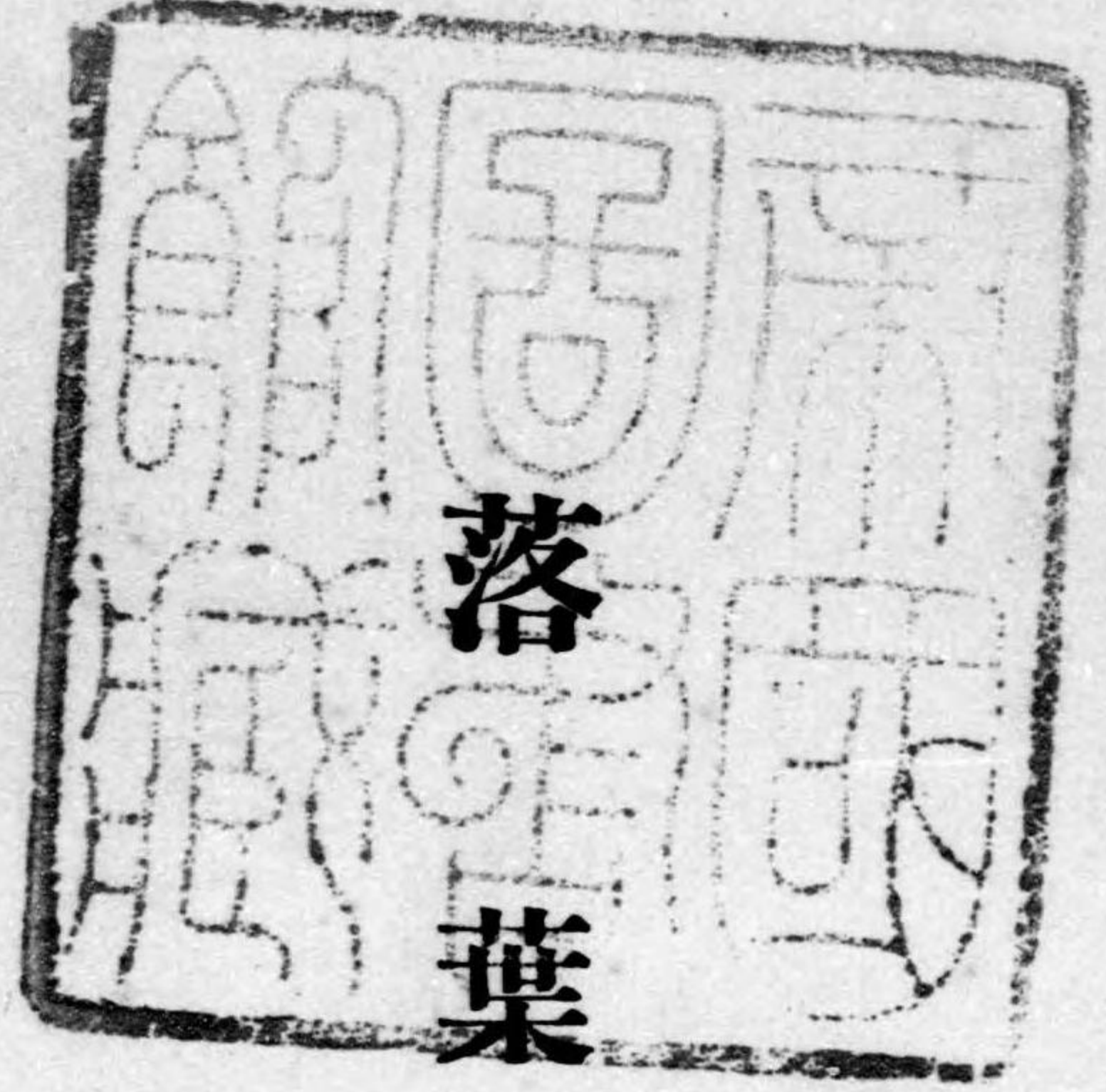


始



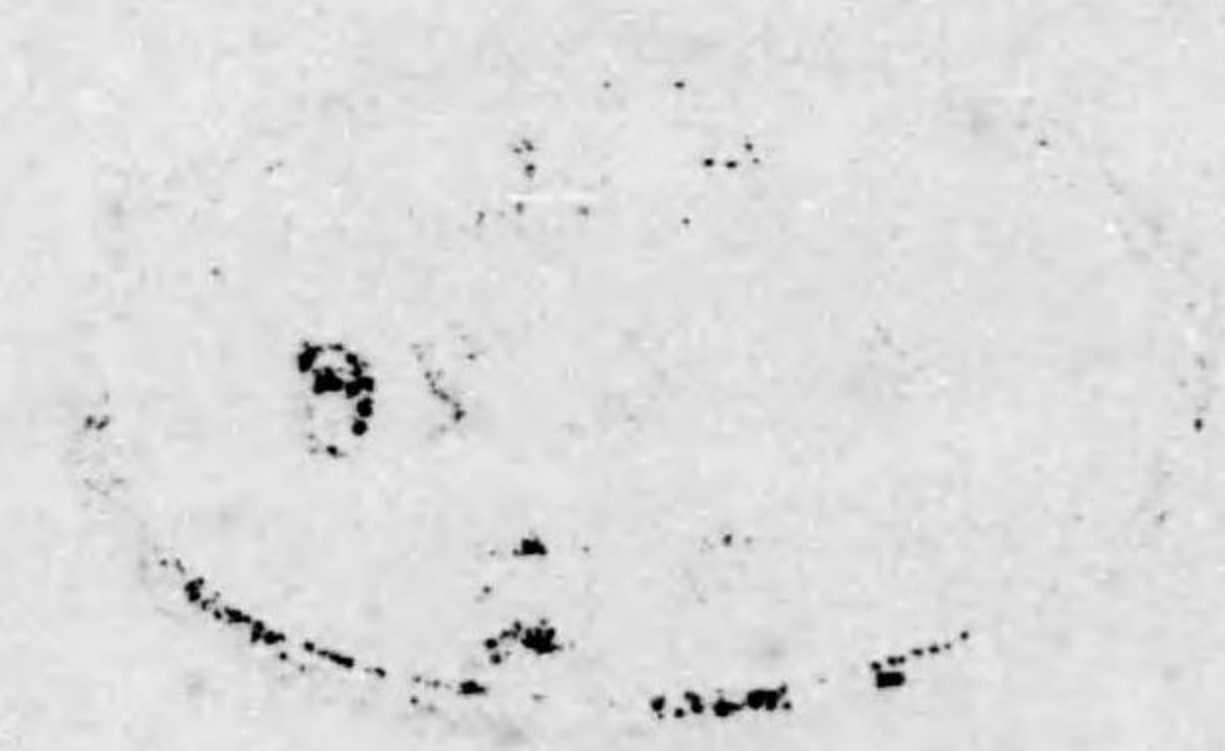
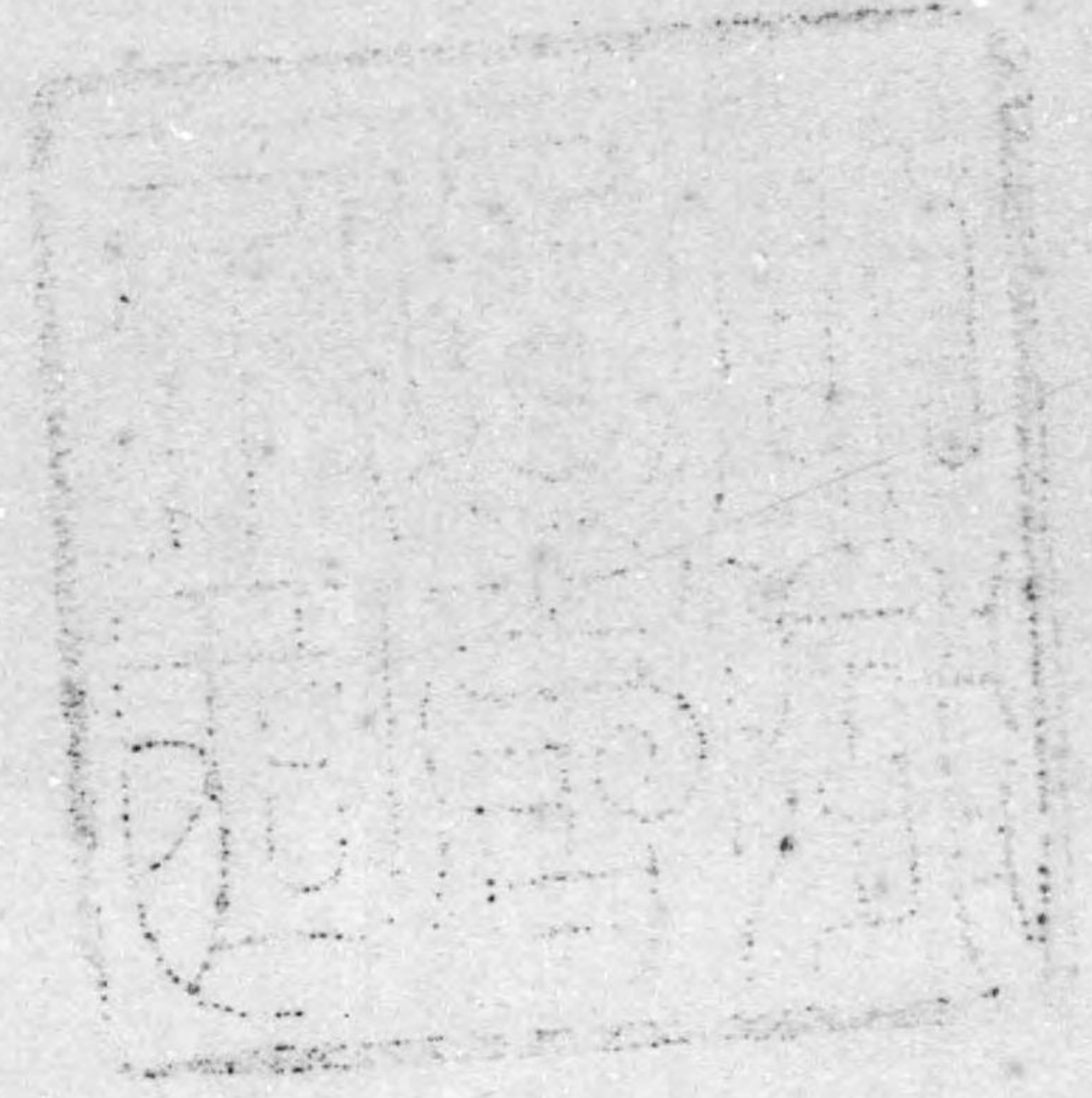
特100
90



宮

綠
川

大正
4. 4. 26
内交



ゆふ空……………1

白百合……………6

龍姫の嘆き……………22

歌舞伎女……………42

孤兒なれば……………51

垂帳一重……………62

牧場の神歌……………68

短歌(得)……………101

量に公表せる塔影以降種々の方面に致せし試みを蒐めたるもの、素より枯葉病葉の醜骸、捨つるに處を得ず焚くに甲斐なきも墓たてる出裾の小徑に若し人ありて踏ま

1
夕
空

落葉宮



(1)

ますら男をが司つかさの『畫ひが』

ゆ
ふ
空

ば微かに靈の囁きを傳はで
やあるべきと落葉宮と題し
之を亡友山本煙山君の墓前
に捧ぐ

大正四年二月

綠川

赫かざやきの征ま矢やをゝさめて
西にしに没いる何なにの啓しめ示しぞ
彩いろざる雲くも

(2)

高たかく濃こき簇むら立た雲ぐもの
峯みねあらわ山す裾そ雪な崩たれ
流ながる渦うず潮しほひくゝ淡あわく

夕ゆふ映はしばし

(3)

紫むらさきは移うつろい褪ある
戀こひごゝち燃もゆ紅くれなゐは
若わかき血ちのやがては灰はいと
冷ひよぬべきを

(4)

金色こんじきを八重やゑにたゝみ

光てる眞珠またまひろ尋ひろに築きつくも

酒さけひたす夢ゆめはくづれて

蒼あをき面おもて

(5)

掌たなこころ秘ひむ富とみとは何なにぞ

戀こひ何なにぞひらけば空ひらし

血ちは涸かれて骨ほねの白しろきに
惑まごひ咽ひせぶ

(6)

手た弱やめ女めが統すぶる『夜よ』は來きぬ

暗くらき色いろの袖そでをかゝげて

つゝむ枢ひつぎきは牙はを鳴ならして

魔まは嘲あざわら笑わらふ



白百合

(1)

枝えだつがふ

葉はうらこす

夢ゆめの垂帳たれぢやう

榛はんの林はやしの

うすめ明あかりの

ゆらめきて

黄きばみ葉はの

音おともなし

ひたくと

灰はい色いろの

そこに淀よどむ

(2)

あだに朽くつ

ゆるく翻かへれば

樹こ間ま縫ぬふ小を川がわ

草くさをひたして

雲くもの片かた影かげ

うつほの小を舟ぶね

掉さしき

かたむきて

苔に浸みて

荆棘みち

青き蜘蛛

舟路には

鱈魚牙を鳴す

誰かその昔

湛ゆ濁水

魔女がとざしの

蛇纏れ

網はりふさぎ

群れ棲む蜴蜥

(3)

泉わく

花の園

水ぐるま

ほの匂ふ

酔ひごち

こがれ漕ぐ

其川かみの

流れ通ひて

姫住む村に

姫は掬びて

忍びのかひに

帳をぐらき

魔の林まのはやし神秘の園しんぴのそのに

(4)

呼吸いきそよぐその百合ゆりはあの星ほしを夜の星よほしを展開ひらけて出いぬ四季しきの園生そのふの神かみの手てづから白しろふかやく招まねきて埋うめて培つちかふて濡うるほひの芽めばへして花はな咲さき薫かほる

(5)

美うつくしや艶つやの香かに雫しづくと落をちし姫ひめの涙なみだに一ひとよ夜よにしげりおゝ美うつくしや憧あこがれ酔よふて培つちかふて濡うるほひの芽めばへして花はな咲さき薫かほる

(5)

美うつくしや艶つやの香かに雫しづくと落をちし姫ひめの涙なみだに一ひとよ夜よにしげりおゝ美うつくしや憧あこがれ酔よふて

寄り添ふて

はなれ難なの

姫謠ふ

『花の姿よ

常夏のー我古郷へー

凋りそ枯れそ

此胸に

汝よ接吻て

湧き出る

戀の泉を

汲めよ花づま

(6)

肌はだに添そる

雨あめに惱なやむな

袖そでに隠かくれ

風かぜに狂くるふな

我わが涙なみだ

露つゆほろくど

喝かわくとき

また飢うめるとき

我わが血ち潮しほ

紅べにさす珠たまの

滴したりを

花はなの雄を蕊しへに

くちづけて

花はな守もも姫ひめは

舟をし下す

(7)

生氣あふる

白む面

いざ舞ふ

手をとりにて

謠ふよ

凜々しき花よ

てる鮮美さ

ともに舞ふよ

いざ謠ふよ

舟のり捨て

木がくれに

戀の歌

花を翳して

(8)

黒き巖

白き髪

棲む姥が

愛の唇

花を擁きて

をごろにかくる

此瀧津瀬に

藻かつぎ衣

白銀しろかねの

うたゝ寝ねの

さゝやくは

醜羽しこはねの

聲こゑうちふるふ

(9)

嘲あざみ吹ふく

泡あわにひそみて

魔女まじよが耳みみもと

かば色いろしたる

嫉ねたみ蝴蝶こてふの

毒血どくちの狭霧さぎり

うそむけば

呪のろひの歌うた

「姥うばをびやかす

愛あいの白百合しろゆり

穢けがして渡わたす

掟おきては『死し』なるを

蜥蜴こかす疾さく行ゆけ

しの笛ふえみだる

戀こひの姫ひめ

魔女まじよが川かわ

靈れいの林はやしの

腹はら赤あかき

嚙かみて枯からせ』

謠ふ姫

溪水に

淡雪の

垂髪は

髻りて

嫦娥姫が

(10)

花汗ばみぬ

肌を沐浴

うすものなびく

霞の糸に

あらねば簪

花の桂を

からばやな

化粧なまめく

(11)

あぎと裂け

舌ながく

牙白き

青き莖

誰が爲めにとて

炎と燃ゆる

朱に染まりて

蜥蜴うねりつ

噛みさきふるひ

甘き汁あまじり

むさぼり吮するば

花窠はなつぼれうら枯かれぬ

姫ひめは『あなや』と

むせび伏ふして

悲かなしさけび

あゝ可憐いさし花はな――

(12)

肌はだに抱だき

髪かみに翳かざして

くづをれの

花はなの亡なき靈たま

露つゆひたる

姫ひめの涙なみだは

つぎじ怨嗟うらみ

百夜ももよながれて

溪川たにがわの

淵ふちはなだれぬ

崩壊なだれの淵ふちに

花はなと姫ひめとは

姫ひめと花はなとは

擁いだかれて――

擁いだかれて――



朧姫の

なげき

暁色の被衣の
(上)

をぼろ姫

白よそほひの

あさがほの

蕾さばこふ

色繪筆

一つ彩さす

うす紅は

笠よ簪よ

日ひから傘がさ

二ひたつ染そめたは

むらさきの

長なが袖そで小こ袖そで

京きよ袴はかま

三みつつしぼりし

淡うすあさぎ

扱い帶たすき襷たすきか

あづま帯おび

ひとゑ振ふり袖そで

だて帯おびの

をうなひろげし

翳かきし傘がさ

露つゆでさらした

花じやまで

染められまいか

染むまいか

さてもみごとな

色の彩

緑ぬれ葉の

なよ姿

酔ふて見惚れた

をぼろ姫

またゝく星が

よびさます

『花のかげより

夜は白らむ

天のうたげの

朝あさぼらけ

ながなき鳥とりは

歌うたのやく

姫ひめの曲きょくなる

たて箏こしの

調しらべこそ待まて

疾こく歸かへりませ』

(中)

露つゆのわかれの

本意ほんいなさに

雲くものおちおば

たのふでは

荒あらいら日ひざしを

曉星あけほしを

袖そででかくして

きり雨さめの

降ふれよへだてよ

曉あけの色いろ

うすれぬ暇ひまの

かたらひも

盡つきじにうたて

晝ひるくれば

傘かさをつぼめて

袖そでふらぬ

さても儂はかなき

いのちぞと

泣なきのなみだの

午ひるさがり

雨あめの日ひなれば

をぼろむら姫

ひるがほ許かりに

訪問をきづれて

あまりよふ似にた

面おもざしを

思しぶよすがの

花はながたり

『姫ひめよきかしやれ

こひ染ぞめの

褪あせた日傘ひがさや

帯おびはかま

きのふ巢す立たちし

雛ひなごりが

戯れあふ嘴の

ついはみに

破れもやれたり

つゝれたり

みるかげもない

色ながら

日暮るゝまでの

このはなを

一つまいらす

姫摘なませ』

(下)

ないて暮した

龍姫

よき分別を

からばやと

夕顔許りに

たちよれば

白ふ微笑む

そのはなが

慰籍がほで

いやるには

「花はかれても

莖ふたば

つるだにあれば

また咲かふ

明日も咲かふに

ふるごやの

若い羊が

兒を産んで

乳は吮はれる

餌は足らぬ

きのふつきたり

きり畑の

青菜白菜の

かるしろに

莖もはまれて

根も荒れた

つぼみ凋れふ

芽も枯れふ

持ちやる筐の

ひるがほは

似たりかよひの

小花傘こはながさ

つげば繼柄つぎるの

長柄傘なががさ

かざせみそらに

姫ひめが手てに

蕾つぼみも出で来きふ

葉はも出いでふ

花はなも咲さかふよ

實みもなるふ

あまり嘆なげきの

いたましさ

此このつる一ひと枝えだ

いざ手た折をませ』



歌舞伎女

鬼をひき出いだす

よこ糸いと血ちぞめ

なみだかた手てに

繰くる小田おだ巻まきの

はたのたて糸いと

あや目めもかすむ

燈火とうしちらく

夜よの廣ひろ小路こうぢ

影かげもをぼろの

とばりが揺ゆぐ

やみに白しろらく

魔ものゝ牙が

かちりくご

木の頭――

歌舞伎乙女が

痩せさらばいて

舞を舞ふか

歌謡ふか

指す手けだるい

聲嘎れきしむ

責の杖に

黒血がにじむ

業の絆は

錢紋蛇の

足をからまき

手てにくい入りいて

縛もつれまいぞと

手元てもとでさばき

繰あやつり囃はっす

魔まの聲こゑきけば

『いち』の歌うたひめ

血ちの香かが失うせた

二にの舞ま姫ひめは

肉し塊かた瘦ませた

舞まゑよ謠うたゑよ

疲つかれて寝ねやれ

やがて皮かわ剥はぎ

肉にく裂さきすてゝ

臟わたをゑぐりて

骨嚙みくだけ

髓を甜ろふ

いざ舞る謠へ

舞ふて謠ふて

疲れて寝やれ』

噓し舞ふたり

姫が歌きけば

『關節は挫けご

舞わねばならぬ

喉は裂けても

謠わにやならぬ

肌の生創傷

錦でつゝみ

白髪むしれ髪

かつらを着てせ

蒼き顔には

白粉塗りて

褪せた口唇

紅ときさして

悲しなみだを

笑顔で見する』



孤兒なれば

分けき血の

こもりの肌はだに

頬ほづりの

温情ぬくもり知らじ

孤兒みなしこなれば――

滴したりの

乳ちのうまし香かに

咽頭のど鳴りて

唇くちうるほわじ

孤兒みなしこなれば――

大理石マアプルの

冷酷つめたきはだに

添そひふして

乳房ちぶさにこがる

孤兒みなしこなれば――

夢ゆめやすき

添乳そへちの歌うたの

ひとふしも

耳みみにのこらじ

孤兒みなしごなれば――

父ちちなきに

他人あだびと戀し

母ははなきに

憂世うれよ慕したはし

孤兒みなしごなれば――

人ひとは憂うれし

つゞれ汚穢ひびきに

すがる手てを

ふり解とき過すぎぬ

孤兒みなしごなれば――

世よはつらし

飢うゑよるぼいて

食乞^{ものこ}るば

面^{おもて}をそむく――

孤兒^{みなしこ}なれば

父^{ちち}なきか

母^{はは}もあらしか

産^{うぶ}すなの

神^{かみ}をや知^しれる

孤兒^{みなしこ}なれば――

それ地^{つち}は

汝^{なれ}はぐゝみの

母^{はは}なるよ

天^{あめ}こそ父^{ちち}よ

孤兒^{みなしこ}なれば――

春^{はる}織^をれる

孤兒なれば

霞かすみ着きて舞まる秋あき染そめし紅もみぢ葉ぢかざせよ孤みなしこ兒こなれば氣きは澄すみて愛あいのそよ風かぜ接くちづけ吻は身ほごり邊りをめぐる孤みなしこ兒こなれば――慰なぐさめ籍さだめの磯いその松まつ風かぜ横ハモニカ笛カの曲きょくともきけよ孤みなしこ兒こなれば――

孤兒なれば

孤兒なれば

夕空ゆふぞらは

たくみの色いろの

繪卷物ゑまきもの

展のべて啓示しめしぬ

孤兒みなしごなれば――

太鼓ドラムうつ

和田わだの大海おほうみ

孤兒なれば

まろび飛とぶ

水沫たまたま玩弄あそべ

孤兒みなしごなれば――



垂帳一重

垂帳一重に

世は二たをもて

立てる手弱女

かづきの衣の

たれて隔てし

振分すがた

舞のてぶりに

袖振分けて

右は長袖

左は小袖

裾のさばきに

振りわけづま
振分袂の

うゑし
上は白むめ

したひ
下緋の櫻

まへ
前とうしろに

み
身は裏表

をもちて
面照るく

そびら
背後は曇る

うれし
うれし容貌

えみ
微笑かたむけて

うなじ
うなじ垂髪

わた
嫉みにうねる

みそら
御空あふぎて

はなわ
ダリヤの花環

めで
右手に薫りつ

終日ひねり咲けば

神かみようけませ

此この捧さかげもの

萎ほみなゆれは

枕まくらにしきて

地つちにまろびね

夜よすがら左ひだり手

招まねきよせなむ

呪のろ咀ひの小こうた

口くちにきざみて

魔まの膝ひざいだく

垂帳さはり一重ひとえに

世よは二ふたをもて



牧場の

神歌

(1)

橙色オレンジの

雲くもの彩筆いろすぢに

瑠璃るり溶ときし

真澄ますみの空そらは

歌うたの雨あめ

翼つばさ翻かへして

舞まひ降くだる

汝なれは雪雀ひばりよ

その歌うたに

丸木まるきの小家こやの

賤乙女しつをじめ

胸の緒琴むねをこじの

さわだちて

そゝろ心こころの

牧場守まきはもり

(2)

素絹きぬかすむ

色彩いろの匠たくみの

春はるの畫ゑの

臙ぼろの丘をかの

孤ひとりつ家やを

繞めぐりて解とけし

帯おビの如ごと

草染くさそめひたす

細流川さわがわ温ぬるめば掬すくべ乳ち汁じ涸かれし牝め牛うし來きて吮すへ牧場守まきはもる童わらべも歌うたに・醉ゑひぬれば

(3)

たゆたげに

建たつ柵さく朽くちて傾かたむきて横木よこぎも折をれぬ今いまはしも笛ふえ吹かき鳴ならし

鞭むちならし

汝なれうつ人ひとも

あらざれば

互かたみにこがれ

憧あこがるゝ

乳房ちぶさに絶すたり

すがらせて

歌うたをこそきけ

親おやも兒こも

(4)

此この園そのに

群むれよ集つまへよ

日ひの恵めぐみ

照てるやうらゝに

汝なの影かげを

一ひとつ一ひとつに

緑みどりり織をる

くゆりの床とこに

包つつむかな

もゆる野の薔薇ばらの

くれなるは

汝なの血ち潮しほに

新あたらしき

生いのち命ちをこそは

注そぐかな

(5)

風かぜよ吹ふけ

散ちれよ散ちれよ

花はなの雪ゆき翼つばさとなりて

ひらくと

汝なれの毛皮けがわをかすむ時とき黄金こがねの冠かぶり

きてたてる

菜なの花はな姫ひめが神かみの宣のり

うけてぞつくる

白しろき乳ち汁じ汝なれの乳房ちぶさに満みつるなれ

(6)

神かみならで

人ひと造つくり得あじ

汝なが生いのち命ち

人ひと釀かもし得あじ

汝なが乳ち汁い

汝なが愛いとしこ兒こを

はぐゝめと

香かほりはたかし

眞ま白しろなる

甘かん露ろのしづく

溫あたたか情かき

愛あいの滴したたり

湧わくものを

搾しほりて嚙ひさぐ

牧場守

(7)

乳汁のみか

涙もしぼる

血も搾る

神の統べます

此野邊の

平和は亂る

悲しげに――

牝牛は叫ぶ

『いたいけに

我兒は痩せて

よろめくを

見ずや牧守

市人いちびとはよろこび啜すする白しろき乳ち汁じ

(8)

こうし瘦やせ牝牛めうし窠やうれぬ只人ただひとは小ちいさき錢ぜにの幾片いくひらに換かゑ得えて肥こゑぬ鬻ひさぎもて家うか族らやしなふ牧場まきば守もりされど貨幣こがねは

世よの人ひとの

空あだに定さだめき

價あたひにて

報つぐ償のひもなし

乳ち汁いの代しろ

(9)

揚あげ雲ひ雀はり

神かみの使つか者ひの

宣のり歌うたを

草くさ間まに低ひくく

うたひつゝ

雲くも間まに高たかく

うたひつゝ

野のにも山やまにも

牧場にも

人のむねにも

牝牛にも

そゝぎかけたる

歌の譜を

翼にのせて

いや翔ける

(10)

『やよ牝牛』

汝が乳房は

搾られて

汝が可憐兒は

瘦するとも

汝を鞭うつ

あだ人の

愛児は肥ゑて

汝が乳汁に

はぐゝまれ笑む

あゝ愛は神

神は愛

汝こそ神よ

恵ある――

(11)

かくてこそ

愛の靈は

とこしゑに

限りもあらし

生命得て

輝かがやく星ほしの

玉たま飾かざる

高あ貴ての愛まな兒ごの

母はとなれ

母はとこそなれ

はぐゝみの

乳あ母ごぐるまの

はてもなき

わだちはめぐる

またの世よに』

(12)

揚あ雲ひ雀はり

歌うたの女め神がらに

さづかりの

笛の歌口ふえ うたぐち

此野邊のこののべ

花間の露はなま つゆに

濡すかなしめ

汝の姿はなれすがた

木がくれにこ

御空へのしてみぞら

浮雲のうきぐも

天の罅あめ わづらに

入るとてもい

さやかに響くひびく

歌の雨うた あめ

(13)

『やよ人よひと』

汝は肥ぬれど
 瘦せ窶る
 牝牛を見ずや
 汝が嬰兒は
 笑みて愛らし
 彼のこうし
 よろめき伏せり

人々よ
 汝は肥ゑたれば
 瘦せほそる
 こうし育てよ
 まぐさして
 乳奪ひにき
 償ひに

(14)

しからずば
 汝が肌膚は
 つや褪せて
 瘦せさらばいて
 病み臥して
 血は冷る涸れて

死去も――
 猶將饑るん
 鞭は鳴る
 絆はつらし
 身を責めて
 あさまし姿
 世をかへて

短
歌

得
三
郎

汝^{なれ}をこそ見^みめ

牧場^{まきはら}守

(冥想の机の下より)

何んもなく寂しくなればいで、ゆく、

わるき癖なり、

春も惜しまる。

青葉、
若葉、

池の水ぬるめば、

汀からスーと、春がさけてゆくかな。

酔ひ痴れし男

何か不平もありけらし、

アツくく花にものいふ。

一人来て一人去る家の夜更けて、

ざわめく響、

うら寂しくある。

胸に深く惱みを秘めて、
舞踊なぞ缺さず出かける、

哀れな女。

たま／＼の惚れ心地にも、
悲しみのふひささそねば、

春のつきなむ。

人一人助けて見たし春の宵、

川のふちなぞ、

氣まぐれにゆきて。

頼こけて頼のうちらを囁む癖の、

つゞけば、

いとも悲しくあるかな。

語らずとも済む事迄も、

云つてしまい、

ひとり心に寂しくなる性。

『近松の人々』を読む、

何にがなし悲しくなりぬ、

春の日くるゝ。

海に近き野山の道を辿りければ、

しみじみと青き色、

眼に沁む眼に沁む。

べら／＼と饒舌る癖あり、

Kと云ふ昔ながらの、

其癖く。

白き日の麗らにわたる、

野の草の路に息づく、

可愛ゆき乙女ら。

聲涸れし朝のうれいに、

モカの茶を静に啜る、

春の雨ふる――

病ある身にしあれば、

なかくくに卯月の旅も、

悲しかりける。

(追放の鞭)

波の音の聽てなじめば、

其地をば去り難く思ふ、

それが悲しも。

六の月夜ふけて、

海に向ひし硝子戸を、ちつと、

みつめる、雨にじむなり。

鎌倉は憧憬の地よ、

『春晝』の鏡花の作よ、

なつかしきかな。

カナ／＼のカナ／＼と鳴けば、

鈴太鼓、遠くに響く、

山峽のくれ。

110

なが／＼の旅より歸る、

瘰瘦の「われ」を迎ひて

雨肅かに降る。

(運命の Key)

日に一つ悲しい事を、

ふひとまた胸に浮べて、

この頃を暮らす。

111

すこしまた病心地にて、

うろつける柳の町に、

一ばいの秋の日。

(肉體の殻)

戀人を待つ秋の日の惜まれて、

夜にしなれば、

小雨ふるかな。

照り曇り、時雨してけり、

川沿ひを道者ゆくむれ、

衣のうるわし。

お前と私、二人きり―たつた二人きり、

彼のプラタンの、

秋の夜更けよ。

山城は浮島あたり、

小雨ふる、

春の光のきらめきありて。

L'enfance ありこ昔を偲ぶれば、

胡桃林の、

曙の色。

如月は寒き不安に、

暖かき彌生の花が、

心に芽吹く。

集 詩

塔

影

(刊既)

瓜生緑川著

集 詩

檢鏡下の

うごめき

(刊近)

瓜生緑川著

210
504

不許複製

大正四年四月五日印刷
大正四年四月十日發行

落葉宮奧付
金五拾錢

著者 瓜生綠川

岡山市丸龜町六十四番地

發行兼印刷人 辻助三郎

岡山市弓之町一六六番地

發行所 綠川社

終

